
新宿の夜は暗い

夕焼け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新宿の夜は暗い

【Nコード】

N6252M

【作者名】

夕焼け

【あらすじ】

そこには何もかもがある。だから誰も彼もがそこに群がる。誰も彼もがそこに群がるから、より多くの「何もかも」がそこに蓄積される。積み上げられたその重みでゆがみ、潰れ、腐敗し、けれど、それもやはり「人々が織り成して形成された街」の正しいあり方のひとつなのだ。

まずはじめに、僕は、ばいせくしやるです。

やんわりそれっぽい事は以前にも書いた気がするけど、まあぼかしてもしょうがないから明確にしておこうと思う。

つまり相手が男だろうが女だろうが、恋する時はしちやいますよってこと。

で、昨日はなんか突発的に思い立って新宿2丁目に行ってきたわけだ。

新宿2丁目っていうのはね、まあ知ってる人は知ってると思うけど、知らない人は知らないかもしれないけど、いわゆる同性愛者の人たちが集まってごにごにごにするところなわけですよ。

なんとなくゲイ社会っていうのは、バイの人に対して批判的なアレがあるように感じられる部分がちよいちよいあって、だからそう滅多に2丁目とか「いかにもな感じのところ」には行かないんだけど、昨日はなんか訳のわからない焦燥感に駆られて行ってきた。

いわゆる売り専の人らがタム口ってる駐車場つてのがあって、まあ僕もね、そのガードレールに腰掛けて野坂昭如の「とむらい師たち」なんかを読みふけてたわけなんだけど、そうするとおっさんたちが声をかけてくるわけだ。

「ねえいくら?」「穴は使えるの?」なんていってね、声をかけてくるわけだ。

彼らの多くは、かなり独特のナリをしてて、独特のしゃべり方をす

る。

少なくとも僕は2丁目以外でああいう雰囲気の人たちをお目にかかったことが無い。

とりわけその中でやたらよくしゃべる30代後半くらいの人が出て、その人と話をした。

そのおじさんはどうやら結構2丁目に出没するらしくて、顔見知りも多いようで、通りに行く人たちを指差して「あのおっちゃんはね、女の子っぽい感じの子が好きなんだよ」とか「あの小太りの人はね、いつも徘徊してるけど、誰と話すわけでもなく、なんかいつもただうろろしてるんだよね」とか言ってる、まあそんな話を聞いていると、丁度目の前を男だか女だか分からない超綺麗な子が通りかかって、そしたらやっぱりその子の事もおじさんは知ってたようで、おじさんが声をかけるとその子は僕らのとこにやってきて、それで3時間くらいそこで話をした。

話をしたっていっても、基本おじさんがずっと話してて、あそこのお店の誰が捕まったとか、何処その店はぼったくりだとか、あの公園の辺りによくいた誰々が癌で死んだとか、そんな話で、僕はなんせ2丁目なんて3回くらいしか行ったことがないから、話の内容はほとんどちんぷんかんぷんで、だから口を半分あけて呆けた顔でぼーっと目の前のビルのガラスに書かれた文字を凝視してて、そこには「肩こり、腰痛、一発解消」と書いてあって、その「一発解消」の辺りから、何かただならぬものを感じつつ、上の空で返事だけ返してて、そのたまたま通りかかっておじさんにつかまっちゃった残念な子もほとんど無言でおじさんの話に時々相槌を打つくらいで、とにかく3時間おじさんの声だけが土曜の夜の新宿の喧騒に抗うように響いてて、もうなんとも見事な力オスがそこに醸成されていた。

カオスが醸成されていました。

で話が終わっちゃいよいよカオスだから、話をもう少し掘り下げると、その通りかかった子は丁度女性ホルモンの注射を医者で打ってもらった帰りだと言って、胸はAカップくらいになったと言って、おじさんが「前も番号交換したけど、なぜか繋がらなかったよね、もう一回教えて」としてしくその子に言って、その子は笑顔で「じゃああなたの番号を僕の携帯に登録しますから」と言って、おじさんは「それじゃあ君の番号、俺分らないから俺からかけれないよ」と言って、でもその子はいわゆるそういうおじさんを相手するお仕事の人で、そういうのに慣れてるらしく、「だいじょうぶですから」とか何とか言っとうまい事かわしてた。

僕はその横で、例の「一発解消」の意味を考えたり、考えないようになしてみたりしながら、そんなやり取りを見て、なんとも複雑な気持ちになった。

世の中には、ままならない事が多々ある。

たとえば、女の子に生まれたかったのに、男の子に生まれちゃった人がいる。

彼らのうちの幾らかは、ホルモン注射を打ったり、あれやこれや多分目に見えない努力を散々重ねて、少しでも女の子に近づこうとする。

無論生まれつきの女の子だってみんな相応に努力をしていると思う。ただ、それは「女としてのスタートラインに、最初から立てた上で

の努力」で、対する「女の子に生まれたかったけど、残念ながら男に生まれちゃった子」の努力っていうのは「スタートラインに経つための努力」がまず必要で、その上で、幸せになりたかったらそこから「普通の女の子がしてる種類の努力」を更に上乘せしなければいけない。

そして言うまでも無い事だけど、スタートラインに最初から立ってる人がする努力より、スタートラインに立つための努力の方が、実際のな労力と磨耗を圧倒的に多く要する。

上記の子を見てても、やっぱり何かこう、言葉で言い表せない磨耗のようなものが感じられた。

散々磨り減って、その美しさを手に入れたんだろうなって、見ててなんとなく思った。

多分もともがすごく美しい顔立ちだとか、そういうわけじゃない。良くも悪くも、色んな意味でかなり作ってるって感じた。

もちろん、彼は「自分がどれだけ磨り減って、誰からも評価されない種類の、むしろ場合によっては蔑まれたりもする種類の努力を重ねて、汚れて、その美しさを手にするに至ったのか」を切々と語ったりはしない。

でも、表情やしぐさや言葉の節々から、背負ってきた苦勞の生々しい痕跡が覗える。

美談にならない種類の、鬱屈した何かが、その表情や言動や行動の中に時々垣間見える。

上記の「逮捕された何処何処のお店のオーナー」にも、以前体を売った事があって、そのつながりで警察から連絡がきたって言った。

おじさんは「よくあんなのと寝れるね」と苦々しそうな顔で言うけ

ど、その子は「お金必要だったし」と笑顔で返す。

僕はバイセクシャルだから、昨日出会った子に限らず、何人かの「心が乙女だけど体が男な人たち」を知ってる。

彼らのうちの多くが、やっぱり「真つ当な多くの人たち」が知らない種類の歪みを心に抱えていて、普通の人がいなくていい種類の努力を重ねてて、その過程で、きつと真つ当な人生を生きてたら知らないで済んだはずの醜さや卑しさや不公平さを知る羽目になって、当然それを理解する事には相応の苦しみが伴っていて、彼らの手首に傷があることなんて少なくない、どころかむしろ多いくらいで、黒く煤けた穴倉を通り抜ける際に、自身もまた身を汚しもしただろうし、けれど人前では一切そういう類の黒ずんでしまった部分を見せようとせず、それはきつと「自分を良く見せる」とかそんな短絡的な話じゃなくて、それは彼らなりの生きる知恵で、そのほうが、彼らにとっても周囲にとっても幾分「マシ」であることを彼らは本能的に悟っていて、そういう風に振る舞い、生きる彼らの姿に、僕は何か、よくわからないけど惹きつけられる部分がある。

新宿は暗い街だと思う。

とても暗い街だと思う。

どれだけネオンや喧騒で隠したって、そんなもので覆い隠せない種類の、底なしの暗がり、そこには広がっている。

僕は新宿の裏路地に足を運ぶたびに、毎度葬式場に足を踏み入れた時のような、そら寒さを感じる。

死の臭いを感じる。

その街には実際に犯罪が多くあって、よからぬ欲望の具現する場面がきつと日本中のどこよりも多くあって、さらには本物の死がある。

それでもそこに足を向けなくなる時がある。

暗がりの中で、一瞬だけ輝くものを目にした時、たとえそれが錯覚だとしても、錯覚なのだと自分で理解していても、そのきらめきに手をかざしてみたくなくなる時がある。
衝動だ。

誰の心の中にも、きっと夜の新宿の饅えた臭いのする裏路地のような薄汚さがあつて、無論自覚してる人、自覚してない人いるだろうけど、自覚してようがしてまいが、とにかくあらゆる人の心の中にその醜さや卑しさはあつて、必ずあつて、でも彼らの心の中には幼い男の子や女の子がいて、その子供達はみんな手に一枚の写真を握りしめてる。

色褪せた、だけど綺麗な風景の写真を一枚握りしめてる。

実体の醜さばかりに目を奪われ、それを蔑むのはきつと違うし、彼らの内の少女が握り締める写真の風景の美しさだけを見て、彼らを盲目的に愛でるならそれも多分違う。
きつとどつちもが誤解だ。

僕は結局、醜くありながら、同時進行的に美しい人間っていう不恰好な生き物を、嫌いになれないんだと思う。
その事を確かめたくて、夜の新宿に足を運ぶ。
ほんとかくたまにだけ。

そして、そこには必ずある。
美しさと醜さの混在した、人間の放つ根源的な饅えた臭いが、そこにはある。

吐き気をもよおすような、だけど心の奥底で形容し難い安らぎを感じる、我々人間の放つ臭いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6252m/>

新宿の夜は暗い

2010年10月11日14時42分発行